

# 韓国人日本語学習者の要約文における 論説文の結論の理解に関する問題

朴 恵煥

## キーワード

要約文・原文残存認定単位・要約文の類型・文章構造類型・文の接続関係

## 1. はじめに

日本語教育の読解指導においては、学習者の文章理解のあり方を捉えるために、要約文を課すことが多いが、要約文を通してどのように個々の学習者の文章理解を確かめるのかについては、日本語学習者の要約文に関する実証的研究が今なお少ない現状である。本研究は、佐久間まゆみ（1991・1994・1997）における日本人大学生と韓国人学習者の要約文調査に関する指摘を再検討し、韓国人学習者の要約文の問題点を明らかにすることを主な目的としている。

佐久間（1994：67）において、韓国人学習者による尾括型の論説文の要約文には、原文の結論を欠くものが多く、基本的な読解力不足の問題として、十分に指導する必要があると指摘されている。原文の結論を欠く要約文の文章理解の問題はもちろん、原文の結論を要約文に書いてはいるが、その捉え方に問題のある要約文も多いのではないかと予想される。

そこで、本稿では、先行研究に示された要約者の原文理解が要約文の表現に現れるという仮説に従い、主に日本人大学生（以下、AJと称する）<sup>1</sup>と韓国人学習者（以下、AK2と称する）<sup>2</sup>の要約文を比較することによって、韓国人学習者の要約文における原文の結論の理解の実態を明らかにし、捉え方の問題点の要因を考察する。

## 2. 研究方法

### 2.1 要約調査の方法及び要約文資料

韓国人学習者を対象とした要約調査としては、佐久間まゆみ氏の主宰する「文章・談話研究会」<sup>3</sup>が1988年に韓国で実施した要約調査の報告がある。この調査は、文章構造類型の異なる6種の論説文（A～F）を用いたものであるが、本稿では、その中から、尾括型の論説文「日本人はそんなに駄目か」<sup>4</sup>（以下、原文Aと称する）を用いて、2002年に韓国で実施した追跡調査の結果について報告する。原文Aを選んだ理由は、文章の結尾部に述べられた結論がそれ以前の内容に反する逆説的な主張を反語表現の形式で述べられており、学習者の内容理解がかなり困難なものではないかと考えられるためである。

2002年度の要約調査の概要は以下の通りである<sup>5)</sup>。

- a. 被調査者：韓国の私立2大学の日本語学科4年生、計63名。
- b. 調査時期及び場所：2002年6月3～5日、韓国 ソウル。
- c. 調査内容：日本語の原文A「日本人はそんなに駄目か」(486字)に対する日本語150字要約(課題Ⅰ)、韓国語170字要約(課題Ⅱ)、読解テスト(課題Ⅲ)を作成・記入する<sup>6)</sup>。
- d. 調査の実施手順：原文Aを調査者が一度音読した後、原文を見ながら、被調査者が課題Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを順に作成する。
- f. 指示事項：辞書は用いても良い。

## 2.2 原文A「日本人はそんなに駄目か」の文章構造

原文A「日本人はそんなに駄目か」は、全体が4段落11文486字からなる短い論説文である(【表1】参照)。佐久間(1997:23)に、原文Aの文章構造について、Ⅰ冒頭部(文①～③)・Ⅱ展開部(文④～⑧)・Ⅲ結尾部(文⑨～⑪)の3段<sup>7)</sup>からなり、段Ⅰが「話題提示」、段Ⅱが「理由説明」、段Ⅲが「結論主張」の機能を果たしているとする。さらに、原文Aの文章構造類型(以下、佐久間(1999:1)に従い、「文章型」と称する)については、冒頭部の日本人批判や、展開部の自己批判の内容とは反対に、結尾部では日本人肯定の結論を述べており、原文Aは、結尾部の段Ⅲが「中心段」として文章全体を統括する尾括型の文章であるとしている。

本稿は、この文章構造の分析に従い、原文Aの中で最も統括力の大きい「主題文」は文⑨であると考え<sup>8)</sup>。その理由は、文⑩と⑪が文⑨の主張の根拠付けとなって、文⑨に統括されていると考えられることである。文⑪が主題文となる可能性も考えられるが、文⑪の文末述部の「～のかもしれない」は推量表現であることから、「～のだろうか」という反語表現の文⑨に比べて、主題文としての統括力が相対的に弱いといえよう。佐久間(1989b)が分析した「文の接続関係」による統括機能の観点から見ても、日本人批判・自己批判から日本人肯定へと急旋回する前段の文①～⑧と後段の文⑨～⑪の間は、文章全体の展開を決定する「逆接型」の「文の接続関係」を示しており、この「文の接続関係」が原文Aの結論を導く中心的な統括機能を果たしていることは明らかである。

## 2.3 要約文の分析方法

本稿では、原文Aの結論の理解のしかたを表す要約文の条件として、以下の三つの分析観点を設けた。

- ① 原文Aの3段の構成が要約文Aに残存する。
- ② 原文Aの結尾部の内容が要約文Aに残存する。
- ③ 原文Aの結尾部の「文の接続関係」が要約文Aに残存する。

上記の分析観点を調べるために、要約文Aの「表現類型」<sup>9)</sup>、要約文Aにおける原文Aの結尾部(文⑨⑩⑪)の残存傾向、要約文Aにおける原文Aの結尾部の「文の接続関係」の残存傾向の分析を行う。

要約文の分析尺度としては、佐久間(1997・2000)による「原文残存認定単位」(以下、

【表 1】 原文 A「日本人はそんなに駄目か」の原文残存認定単位リスト

表 題	0-1-1	「日本人は		6-3-2	まだかなどと
	0-1-2	そんなに駄目か」		6-4	生唾をのむ。
筆 者	0-2	牧野 昇	三 ⑦	7-1	或るコラムで、
一 ①	1-1	五〇〇字提言を依頼され、		7-2	何か日本人を叱る
	1-2	一緒に送られてきた		7-3	文章を書こうと
	1-3	見本誌を読んで、		7-4	思い、
	1-4-1	これは		7-5	「日本人は
	1-4-2	大変だと		7-6	ブランド指向だ。
	1-5-1	身が縮む		7-7	汽車の中でも、
	1-5-2	思いになった。		7-8	ルイビトンの鞆をもった
二 ②	2-1	日本人に対して、		7-9-1	連中が
	2-2	何か教訓をたれるとか、		7-9-2	多すぎる」と
	2-3	叱りつける		7-10	書いて
	2-4	内容でないといけないように		7-11	溜飲を下げたら、
	2-5	思ったからだ。		7-12	その原稿を清書した
③	3-1-1	日本人は		7-13	秘書が
	3-1-2	声が		7-14	「会長、
	3-1-3	大きいぞとか、		7-15	先日、
	3-2-1	新幹線のなかのワゴン販売は		7-16	ヨーロッパに行った時に、
	3-2-2	けしからんとかの		7-17	ダンヒルのネクタイを十本買っ
	3-3	お叱りである。			て来ましたね」。
④	4-1	どうも、	⑧	8-1-1	ぎゃふんとした
	4-2	私のことを言っているように		8-1-2	経験がある。
	4-3	思うのだ。	IV ⑨	9-2-1	日本人は
⑤	5-1	私は		9-2-2	そんなにダメ人間揃いなのだろうか。
	5-2-1	一人では	⑩	10-1	しかし
	5-2-2	静か [5-3] だが、		10-2-1	日本経済や社会が
	5-3	(当たり前だ)		10-2-2	安定に動いているのである。
	5-4	大勢になると	⑪	11-1	おそらく、
	5-5	声高でしゃべる。		11-2-1	お互い同士が
⑥	6-1	新幹線のなかでは、		11-2-2	叱正し合うという
	6-2	ビールを呑んだり、		11-3-1	独得の仕組みが、
	6-3-1	弁当は		11-3-2	安定化に一つの貢献をしている
					のかもしれない。

(注) 佐久間 (1997:【資料 3A】) より引用。

Z単位と称する)<sup>10</sup>を用いる。「Z単位」とは、要約文と原文との言語表現の対応を客観的に判定するために設けられた要約文分析のための「作業仮説的単位」である<sup>11</sup>。

## 2.4 要約文の表現類型の分析方法

要約文の表現類型の分類は、以下に示す佐久間（1997：29）の方法に従う。

- ① 原文と全要約文の文章を予め「原文残存認定単位」に区分し、全要約文におけるZ単位の残存形態を認定する。
- ② ①の結果を各Z単位別に集計し、残存数と全要約者に対する「残存率（%）」を求め、残存率に対して統計的検定（ $\chi^2$ 検定）を行う。
- ③ ②の結果に基づき、残存数が有意に多いZ単位を「必須単位」、これに準ずるものを「補助単位」と定め、各Z単位の原文における文章構造上の機能と位置付けを検討する。
- ④ ③の分析結果から、原文の冒頭部・展開部・結尾部における「必須単位」と「補助単位」を決め、各要約文の「冒頭部」「展開部」「結尾部」の3構成部分におけるそれらのZ単位の残存形態を判断する。
- ⑤ ④の結果を組み合わせ、要約文の「表現類型」を定め、一覧表にまとめる。

## 2.5 要約文における原文の結尾部の残存形態と「文の接続関係」

原文の結論として要約者が把握した部分は要約文中に残され、要約者が把握した内容理解に基づいて要約文の「文の接続関係」が表される。日本人大学生の要約文の「文の接続関係」を分析したものに佐久間（1989b）がある。佐久間（1989b：208）は、6種の論説文（原文A～F）に対する日本人大学生の要約文における「文の接続関係」の分析を行い、「6種の原文と要約文とにおける文の接続関係を比較してみると、必ずしも特定の接続類型がすべての要約文に残されるわけではなく、それぞれの原文の文章構成の型に応じた接続類型が前後の組み合わせから、残される傾向がある。」と報告している。また、要約文Aの逆接型についても、「原文Aの文⑧と文⑨、文⑨と文⑩の文脈が残ったものであろう」と指摘している<sup>12</sup>。

本稿では、原文Aの結尾部（段Ⅲ）の文⑨⑩⑪がどのような組み合わせで、各要約文に残存するのか、また、文⑨⑩⑪がどのような要約文の「文の接続関係」として残存するかを調べる。「文の接続関係」の類型に関しては、佐久間（1986）と同様、市川（1978）の8分類を用いる<sup>13</sup>。特に、原文Aの結尾部の「文の接続関係」のうち、原文中に接続表現が示されていない、主題文⑨を導く「逆接型」と、原文中に接続表現が示されている根拠付けの文⑩の「逆接型」の残存傾向について注目したい。

要約文Aにおける原文Aの結尾部の文⑨⑩⑪の残存傾向に関しては、伊藤光（1997）の「残存文」という概念を用いる<sup>14</sup>。本稿では、各要約文における原文の文⑨⑩⑪の組み合わせの残存形態を分析することを目的とするため、文⑨⑩⑪の各必須単位<sup>15</sup>が残存する場合は、要約文に当該の文が残存するものとして判断した。

### 3. 分析結果

#### 3.1 韓国人学習者の要約文 A における表現類型

佐久間（1997：29）の方法論に従い、韓国人学習者の要約文 AK2 の「原文残存判定作業」の結果得られた各 Z 単位の原文残存率<sup>16</sup>についての  $\chi^2$  検定を施し、有意に多く残存すると認められる、必須単位としての Z 単位を決定した（【表 2】参照）。その結果、日本人大学生の要約文 AJ に比べて、韓国人学習者の要約文 AK2 は、有意に残存数の多い Z 単

【表 2】 原文 A の文章構成区分と要約文 A の残存数の多い Z 単位

段 段落	文	原文残存認定単位	日本人大学生 AJ		韓国人学習者 AK2	
			延べ数	%	延べ数	%
I		冒頭部（文①～③）				
一	①	<u>1-1</u> 五〇〇字提言を依頼され、	52	85.3	17	27.0
二	②	<u>2-1</u> 日本人に対して、	48	78.7	**44	69.8
		<u>2-2</u> 何か教訓をたれるとか、	35	57.4	**23	36.5
		<u>2-3</u> 叱りつける	44	72.1	**24	38.1
		<u>2-4</u> 内容でないといけないように	46	75.4	**22	34.9
	③					
II		展開部（文④～⑧）				
	④	<u>4-2</u> 私のことを言っているように	46	75.4	**24	38.1
	⑤					
	⑥					
三	⑦					
	⑧					
III		結尾部（文⑨～⑪）				
四	⑨	<u>9-2-1</u> 日本人は	62	101.6	**32	50.8
		<u>9-2-2</u> そんなにダメ人間揃いなのだろうか。	59	96.7	**33	52.4
	⑩	<u>10-2-1</u> 日本経済や社会が	64	104.9	**47	74.6
		<u>10-2-2</u> 安定に動いているのである。	49	80.3	**52	82.5
	⑪	<u>11-2-1</u> お互い同士が	58	95.1	**37	58.7
		<u>11-2-2</u> 叱正し合うという	62	101.6	**35	55.6
		<u>11-3-1</u> 独得の仕組みが、	45	73.8	**39	61.9
		<u>11-3-2</u> 安定化に一つの貢献をしているのかもしれない。	55	90.2	**48	76.2

（注 1）日本人大学生 AJ の結果は、佐久間（1997：24）の【表 1－A】からの引用による。

（注 2）%は、「残存率」を示す。各 Z 単位の残存数（延べ数）を要約者総数で割ったものの百分率。

（注 3）—— 線は、AJ において危険率 1%で「多・多」と判定された Z 単位（必須単位）を示す。

（注 4）\*\*印は、AK2 において危険率 1%で「多・多」と判定された Z 単位を示す。AJ の必須単位と重ならない、AK2 にのみ有意に多い Z 単位（危険率 1%で「多・多」と判定されたものは、「冒頭部」の 3-1-1、「展開部」の 5-2-1、5-2-2、5-4、5-5、7-5、7-6 である。

位の種類が多く (AJ : 14 Z 単位、AK2 : 20 Z 単位)、また、それらの Z 単位の残存率も、AJ に比べて相対的に低いということが分かった。【表 2】の (注 4) から分かるように、韓国人学習者の要約文 AK2 は、日本人 AJ の残存率が低い冒頭部や展開部の具体例に該当する Z 単位が多く残存し、原文 A の重要な要素である各段の中心文を欠くものが見受けられる。このように、要約文における原文中の重要な情報の取捨選択が適切ではないということは、韓国人学習者の原文の理解が不十分だということを示していると考えられる。

次に、要約文 A の表現類型の分析結果 (【表 3】参照) から、両者の相違点が明らかになった。日本人要約文 AJ では、冒頭・展開・結尾部の必須単位がいずれも残存する「3 区分あり」の [a 型] が 34.4 %、「展開部なし」の [d 型] が 21.3 %、「冒頭・展開部なし」の [h 型] が 21.3 % と上位 3 位を占めている。

一方、韓国人要約文 AK2 の表現類型は、「展開部なし」の [d 型] が 42.9 %、「冒頭・展開部なし」の [h 型] が 25.3 %、「一部不十分あり」の [b 型] が 14.3 % の順位となった。

日本人に最も多い [a 型] が AK2 には 2 例で、3.2 % しかないのは、原文 A の文章型を正確に理解している学習者が少ないためであろう。また、要約文 AJ には全く見られない「結尾部なし」の [c 型]、「展開・結尾部なし」の [f 型]、「冒頭・結尾部なし」の [g 型]、「3 区分全部なし」の [i 型] が各 1 例ずつあることも特徴の一つである。原文 A の結尾部の重要性を考えれば、この 4 類型の要約文 AK2 は、原文 A の文章理解にかなりの問題を抱えているものといえよう。

日本人要約文 AJ と共通する表現類型に関しても、韓国人要約文 AK2 の表現類型には、[d 型] [h 型] [b 型] の中でも、2 箇所以上の必須単位が完全ではない下位類型、つまり、[d4 型] [h2 型] [b4 ~ b7 型] の要約文が多い。これらの下位類型も、日本人要約文 AJ には、[h2 型] (4.9 %) 以外は見られないものである。

以上、韓国人学習者の要約文 AK2 の表現類型には、原文の中心文となる重要な情報の理解を誤った類型が多いことが分かった。原文 A の文間や段間の接続関係を把握し、文章の全体構造を理解する力が足りないためではないかと考えられる。

### 3.2 韓国人学習者の要約文 A における原文の結尾部の残存傾向

要約文 A における原文 A の結尾部の文⑨⑩⑪の残存形態を、各残存文の組み合わせによって、【表 4】にまとめた。原文 A の文⑨⑩⑪の各要約文における残存の有無については、伊藤 (1997) の「残存文」の概念を用いて、文⑨⑩⑪の必須単位のうちのいずれかが要約文 A に残存していれば、当該の文が残存するものとみなした。

【表 4】の分析の結果、日本人要約文 AJ では、86.8 % が原文の文⑨⑩⑪をすべて残し、原文の結論を要約しているのに対して、韓国人要約文 AK2 では、「文⑨⑩⑪全てあり」が 33.3 % にとどまっている。また、文⑨を欠く「文⑩⑪あり」が、「文⑨⑩⑪全てあり」と同じ程度で、34.9 % あることが分かった。これは、日本人要約文 AJ には、6.6 % しか見られないものである。さらに、韓国人要約文 AK2 には、日本人要約文 AJ には全く見られない、「文⑨⑩⑪全てなし」が 6.4 % あった。

原文 A の主題文⑨を欠く韓国人要約文 AK2 は、筆者の主張を十分に把握しきれなかったものである。原文 A の文章構造は、反語表現の文⑨でそれ以前の内容を逆転してまと

【表3】 要約文 A の表現類型

要約文の表現類型	1987 年の日本人大学生 61 名 (AJ)*		2002 年の韓国人学習者 63 名 (AK2)	
	人数	%	人数	%
<b>a 3 区分あり</b>	<b>21</b>	<b>34.4</b>	<b>2</b>	<b>3.2</b>
a 1 ○ ○ ○	2	3.3	0	0.0
a 2 ○ ○ ○<○△	7	11.5	2	3.2
a 3 ○ ○<○△ ○	6	9.8	0	0.0
a 4 ○<○△ ○ ○<○△	6	9.8	0	0.0
<b>b 一部不十分あり</b>	<b>10</b>	<b>16.4</b>	<b>9</b>	<b>14.3</b>
b 1 ○ ○ △	6	9.8	0	0.0
b 2 ○ △ ○	0	0.0	0	0.0
b 3 △ ○ ○	4	6.6	0	0.0
b 4 △ △ ○	0	0.0	0	0.0
b 5 △ ○ △	0	0.0	6	9.5
b 6 ○ △ △	0	0.0	2	3.2
b 7 △ △ △	0	0.0	1	1.6
<b>c 結尾部なし</b>	<b>0</b>	<b>0.0</b>	<b>1</b>	<b>1.6</b>
c 1 ○ ○ ×	0	0.0	1	1.6
c 2 △ ○ ×	0	0.0	0	0.0
c 3 ○ △ ×	0	0.0	0	0.0
c 4 △ △ ×	0	0.0	0	0.0
<b>d 展開部なし</b>	<b>13</b>	<b>21.3</b>	<b>27</b>	<b>42.9</b>
d 1 ○ × ○	10	16.4	0	0.0
d 2 ○ × △	3	4.9	0	0.0
d 3 △ × ○	0	0.0	4	6.4
d 4 △ × △	0	0.0	23	36.5
<b>e 冒頭部なし</b>	<b>4</b>	<b>6.6</b>	<b>5</b>	<b>7.9</b>
e 1 × ○ ○	3	4.9	2	3.2
e 2 × ○ △	1	1.7	3	4.7
e 3 × △ △	0	0.0	0	0.0
e 4 × △ ○	0	0.0	0	0.0
<b>f 展開・結尾部なし</b>	<b>0</b>	<b>0.0</b>	<b>1</b>	<b>1.6</b>
f 1 ○ × ×	0	0.0	1	1.6
f 2 △ × ×	0	0.0	0	0.0
<b>g 冒頭・結尾部なし</b>	<b>0</b>	<b>0.0</b>	<b>1</b>	<b>1.6</b>
g 1 × ○ ×	0	0.0	0	0.0
g 2 × △ ×	0	0.0	1	1.6
<b>h 冒頭・展開部なし</b>	<b>13</b>	<b>21.3</b>	<b>16</b>	<b>25.3</b>
h 1 × × ○	10	16.4	3	4.7
h 2 × × △	3	4.9	13	20.6
<b>i 3 区分全部なし</b>	<b>0</b>	<b>0.0</b>	<b>1</b>	<b>1.6</b>
i 1 × × ×	0	0.0	1	1.6
i 2 △ × △	0	0.0	0	0.0
合 計	61	100.0	63	100.0

(注) \* 要約文 AJ の表現類型は、佐久間 (1997: 31) の【表 4 - A】から引用したもの。  
 必須単位の有無による表現類型の判定を再検討して、[b2] [d2] に各 2 箇所、[e2]  
 [h2] に各 1 箇所、計 6 箇所を修正した。

【表4】 要約文Aにおける原文の文⑨⑩⑪の残存形態

資料 \ 残存形態	文⑨⑩⑪ 全てあり	いずれかが欠けている						文⑨⑩⑪ 全てなし	合計
		文⑨⑩ あり	文⑨⑪ あり	文⑩⑪ あり	文⑨の みあり	文⑩の みあり	文⑪の みあり		
AJ	53 (86.8)	1 (1.6)	1 (1.6)	4 (6.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.4)	0 (0.0)	61 (100)
		8 (13.2)							
AK2	21 (33.3)	0 (0.0)	5 (7.9)	22 (34.9)	3 (4.8)	1 (1.6)	7 (11.1)	4 (6.4)	63 (100)
		38 (60.3)							

(注) ( ) の中は、各組み合わせを用いた要約文数を要約者総数で割ったものの百分率。

めたものだが、韓国人学習者にとってはその理解が困難であったと考えられる。

日本人と韓国人学習者の要約文Aにおける文⑨⑩⑪の残存形態から、韓国人学習者の原文の結論の捉え方の問題について考察する。

#### (例1) 文⑨⑩⑪全てあり／AJ－057 [a1 ○○○]

〈1〉日本人に対して、(2-1) / 教訓を述べるとか (2-2P) / 叱りつけるといった (2-3P) / 内容の五〇〇字提言を依頼された (2-4P+1-1P)。// 〈2〉が、(P) / 日本人を叱る (2-1P+2-3P、7-2P) / 文章はというと (1-1P、7-3P) / ほとんど自分にあてはまってしまう。(P+4-2P) // 〈3〉そんなに (9-2-2P) / 日本人は (9-2-1) / ダメ人間揃いなのか。(9-2-2P) // 〈4〉しかし (10-01) / 日本経済や社会が (10-2-1) / 安定に動いている。(10-2-2) // 〈5〉それは (P、10-2-1P+10-2-2P) / おそらく、(11-1) / お互い同士が (11-2-1) / 叱正し合うという (11-2-2) / 独得の仕組みが、(11-3-1) / 安定化に一つの貢献をしているかもしれない。(11-3-2) //

(注) 〈 〉 は、要約文の文番号、( ) の中は、Z単位。\_\_\_\_の部分、必須Z単位。要約文AJ－057の例は、佐久間(1997)より引用したものである。

(例1) は、[a型] の要約文Aで、日本人要約文AJに最も多いタイプである。原文Aの結尾部(段Ⅲ)の文⑨⑩⑪がすべて残存する尾括型になっている。このように、要約文AJには、3区分の必須単位がすべて揃った[a型]の34.4%をはじめ、それ以外の表現類型であっても、文⑨⑩⑪がすべて残存する要約文が、86.8%を占めており、要約文AJにおける原文Aの結論の理解のあり方を示しているものと考えられる。

これに対して、韓国人学習者の要約文AK2には、文⑨を欠く要約文が多いのが特徴である。(例2)は、主題文⑨を欠く韓国人学習者の要約文AK2の例である。

#### (例2) 文⑩⑪あり／AK2－205 [d4 △×△]

〈1〉一緒に送られてきた (1-2) / 見本誌を読んで、(1-3) / これは (1-4-1) / 大変だと (1-4-2) / 身が縮む (1-5-1) / 思いになった。(1-5-2) // 〈2〉日本人に対して、(2-1) / 何か教訓をたれとか、(2-2) / 叱りつける (2-3) / 内容でないといけなように (2-4) / 思ったからだ。(2-5) // 〈3〉ブランドのついでのごやふんとした (7-6E+8-1-1) / 経験がある。(8-1-2) // 〈4〉でも (10-1E) / 日本経済や社会は



(10-2-1P) /安定している。(10-2-2P) // <5> お互い同士が (11-2-1) /叱正し合うという (11-2-2) /独特の仕組みが (11-3-1P) /安定化に一つの貢献をしているかもしれない。(11-3-2E) //

(例2)の要約文AK2は、文<4><5>で、原文の文⑩⑪の両方とも原文の表現に近い形で残存させている。これは、文⑪を主題文としてとらえ、文⑩をその根拠として提示しているように考えられる。AK2には、このようなタイプの結論の捉え方に問題のある要約文が34.9%と多い。

### 3.3 韓国人学習者の要約文Aにおける原文の結尾部の「文の接続関係」

原文Aの結尾部(段Ⅲ)の「文の接続関係」を反映して、要約文Aに表れると予想される「逆接型」には、次の3種が考えられる<sup>17)</sup>。

- (1) 逆接型Ⅰ一文⑧と文⑨の間に想定される。原文Aには明示されていないが、原文Aの文章全体を統括する逆接型の文の接続関係。
- (2) 逆接型Ⅱ一文⑨と文⑩の間に想定される。原文Aには、文⑩の接続詞「しかし」を用いて表れている逆接型の文の接続関係。
- (3) 逆接型Ⅲ一文⑩と文⑪の間に想定される。原文Aには見られない逆接型の文の接続関係。

【表5】は、要約文Aの結尾部の接続表現による「逆接型」について調べたものである。日本人要約文AJには、逆接型Ⅱが37.7%で最も多く、次に、逆接型Ⅰが29.5%になっている。逆接型Ⅰは原文Aには接続表現が明示されていないことを考えると、日本人要約文AJでは、文⑨が導く逆接型の「文の接続関係」の重要性を理解しており、その結果、(例3)の要約文AJのように、逆接型の接続表現を用いて、要約文の文脈展開を積極的に補っているのではないかと考えられる。

(例3)「逆接型Ⅰ」/AJ-038/a2 [○○○<○△]

<1>五〇〇字提言を依頼された(1-1P)/私は、(P、5-1)/日本人に対し(2-1P)/何か教訓めいたものを、(2-2P)/書かなければならなくなった。(2-4P+2-5P)//<2>確かに(P)/日本人には、(3-1-1P)/叱りつけられるべき所が(2-3P+2-4P)/あるのだが、(P)/どうも(4-1)/自分も(4-2P)/その内の一人らしい。(P+4-2P+4-3P)

【表5】 要約文Aにおける結尾部の「逆接型」の接続表現の残存傾向

要約文資料 \ 逆接型の区分	逆接型あり			逆接型なし
	逆接型Ⅰ	逆接型Ⅱ	逆接型Ⅲ	
AJ	18 (29.5%)	23 (37.7%)	1 (1.6%)	19 (31.2%)
	42 (68.8%)			
AK2	4 (6.3%)	21 (33.3%)	3 (4.8%)	35 (55.6%)
	28 (44.4%)			

// <3> しかし (P) /日本人は (9-2-1) /そんなに駄目ではないはずだ。 (9-2-2P) //  
 <4> お互い同士が (11-2-1) /叱正し合うという (11-2-2) /独得の仕組みが、 (11-3-1)  
 /日本経済や社会を安定化させているのが (10-2-1P + 11-3-2P) /いい証拠である。 (P、  
 11-3-2P) //

(注)  の中は、「逆接型」の接続表現であり、\_\_\_\_\_線は、接続表現に続く文、または節を示す。以下、同様。

ところが、韓国人要約文 AK2 では、逆接型 I が 6.3 % で、要約文 AJ の 29.5 % に比べて少ないが、逆接型 II は、要約文 AK2 が 33.3 % で、要約文 AJ の 37.7 % に近い。しかし、韓国人要約文 AK2 の逆接型 II は、日本人要約文 AJ とは違い、主題文⑨を欠くものが多いことから (【表 4】参照)、原文 A の結尾部の文脈展開とは異なる要約文の結論になっているという問題がある。

(例 4) 「逆接型 I」 / AK2 - 143 / h2 [××△]

<1> 不思議だと (9-1P) /思うほど (9-1P) /日本人は (7-5) /ブランド指向だし、  
 (7-6P) /声が (3-1-2) /大きいぞとか、 (3-1-3) /新幹線のなかのワゴン販売は  
 (3-2-1) /けしからんとかの (3-2-2) /お叱りである。 (3-3) // <2> でも (E) /そんな日本人けど、  
 (9-2-2E+9-2-1E) /日本経済や社会が (10-2-1) /安定して (10-2-2P)  
 /動いているのは (10-2-2P) /日本人のお互い同士が (11-2-1P) /叱正し合うという  
 (11-2-2) /独得の仕組みが、 (11-3-1) /安定化に一つの貢献をしているのかもしれない。  
 (11-3-2) //

(例 4) は、韓国人要約文 AK2 には少ない逆接型 I の例であるが、原文 A の文⑨の反語表現の解釈を誤っている。原文 A では、「日本人はそんなに駄目人間揃いのだろうか。」と逆説的に主張しているのに、(例 4) は、「そんな日本人けど」と、日本人批判の内容になっており、原文 A の結論の理解が間違っている。

また、韓国人要約文 AK2 には、次のような接続表現の誤用例も見られる。これは、原文 A の主題文⑨の反語表現を誤解したために、誤った「文の接続関係」の表現になったものと考えられる。

(例 5) 「逆接型 II」 / AK2 - 131 / d4 [△×△]

<1> 日本人に対して、 (2-1) /何か教訓をたれるとか、 (2-2) /しかりつける (2-3E)  
 /内容でないといけなように (2-4) /思っていると (2-5E) /日本人は (3-1-1E) /一人では (5-2-1) /しずかだが (5-2-2E) /大勢になると (5-4) /声高でしゃべる。 (5-5)  
 // <2> そして (E) /日本人は (9-2-1) /そんなにダメ人間揃いのだろうか  
 (9-2-2E) /思います。 (9-1E) // <3> それでも (10-1P) /日本経済や社会が  
 (10-2-1E) /安定して (10-2-2P) /動いているのである。 (10-2-2P) //04 独得の仕組みが  
 (11-3-1P) /安定化に一つの貢献をしているのかもしれない。 (11-3-2) //

(注) ~~~~~線は、接続表現の誤りを示す。以下、同様。

(例6)「逆接型Ⅱ」／AK2－140／d4 [△ × △]

〈1〉原稿を依頼され、(1-1P) / 大変だった。(1-4-2P) // 〈2〉日本人について (2-1P) / 何か不定的な事を書くべきだと (2-2E + 2-3E + 2-4E) / 思ったからだ。(2-5) // 〈3〉人だちは (E) / 日本人は (7-5) / 名品だけをほしい人だと (7-6E) / 言って (7-10P) / ひなんする。(7-11E) // 〈4〉そして (P) / 日本人は (9-2-1P) / その理由のために (P) / 駄目だと (9-2-2E) / 言うのだ。(E) // 〈5〉しかし (10-1) / 日本は (10-2-1P) / 現在、(P) / 経済も (10-2-1P) / 安定的に動いているが (10-2-2E) / お互いの行重について (11-2-1P + E) / 叱正してもらっているからだと (11-2-2E) / 思うのだ。(P) //

(例5)と(例6)は、いずれも、文⑨⑩⑪が全て揃っており、原文Aと同じく、文⑨と文⑩の残存文の間に逆接型の接続詞が表れている逆接型Ⅱである。ただし、両方とも文⑨の前に、添加型の接続詞「そして」を使っており、展開部の文④～⑧と文⑨の間の接続関係が原文Aは異なる内容になっている。さらに、主題文⑨の残存文の内容を見ると、(例5)は「〈2〉そして日本人はそんなにダメ人間揃いないだろうかと思います。」と、述部の誤用及び主題文⑨の解釈の曖昧さが見られる。また、(例6)は「〈4〉そして日本人はその理由のために駄目だと言うのだ。」と、文⑨の解釈が原文と反対になっており、このような誤解が要約文の「文の接続関係」の誤りにつながっていると考えられる。

このような例は、逆接型Ⅱの場合は、原文Aの文⑩に接続詞「しかし」が明示されているので、韓国人要約文AK2には残りやすく、誤用も少ないが、原文Aの文⑨には示されていない逆接型Ⅰは、韓国人学習者には理解されにくいことを示すものではないか。文⑨に関わる文の接続関係の理解を困難にする、もう一つの要因は、韓国人学習者が文⑨の反語表現を理解できなかったために、原文Aの文脈展開を十分に理解できなかったことによるものと考えられる。

#### 4. ま と め

韓国人学習者の要約文AK2は、日本人大学生の要約文AJに比べて、要約文の表現類型の種類や出現率が異なっていることから、韓国人学習者の文章の全体的構造を把握する能力に問題のあることが確認された。これは、佐久間編(1991・1994)の指摘と同じ結果である。原文Aの必須単位を欠く韓国人要約文AK2の中には、要約文の最初から話題提示なしに、いきなり日本人批判の具体例を列挙したり、見本誌の日本人批判と筆者の自己批判の内容を混同したり、原文Aとは異なる日本人批判の内容で締めくくるものなどが見られ、これらの要約文AK2の表現から、要約者の原文Aの理解に問題があることが分かった。

要約文AK2における原文の結尾部の接続表現の残存傾向を分析した結果、韓国人学習者の要約文AK2に多い、内容のつながりの悪さや、原文Aの結論の誤解などは、原文の全体的構造、すなわち文章型の把握に関わる文の接続関係を正確に捉えられなかったことが、その一因として考えられる。

## 謝辞

本稿は、平成14年度の早稲田大学大学院日本語教育研究科に提出した修士論文の一部をまとめたものである。本研究のために、貴重な要約調査のデータの使用をお許しいただいた指導教授の佐久間まゆみ先生に感謝申し上げます。また、先生の主宰する文章・談話研究会（TDK）の藤村知子、檜尾頌子、後藤利枝の3氏には、要約文の原文残存判定作業にもご協力いただきました。2002年度に韓国で実施した要約調査にご協力いただいた早稲田大学の川口義一教授、韓国の同徳女子大学校の李徳奉教授、檀国大学校の金碩子教授と大学生の皆様にもお礼申し上げます。

## 注

- 1 日本人大学生の要約文AJのデータは、佐久間まゆみ氏の許可を得て、佐久間（1997）より引用した。
- 2 佐久間（1991・1994）では、1988年度にソウルで調査した6種の原文A～Fのうち、原文Aの韓国人要約文をAKと呼んでいる。本稿では、その追跡調査として2002年6月にソウルで収集した韓国人学習者の要約文AをAK2と呼び、過去のAKをAK1と呼ぶことにする。今回は日本人と韓国人学習者の相違点を考察することが目的であるため、AK1については言及しないが、後日の課題として、AK1とAK2の比較も考えている。
- 3 文章・談話研究会（TDK）では、1986年から1997年にかけて日・韓における要約文調査を実施し、その共同研究の成果を佐久間編（1989b・1994）、佐久間（1991・1997）にまとめた。また、1997年から1998年にかけては、聴解要約文の調査に着手している（佐久間2000参照）。
- 4 『PHP』442号（1985.3）PHP研究所。486字。
- 5 要約文AJの要約調査概要については、佐久間編（1989a）を参照されたい。
- 6 韓国語170字要約と読解テストについては、別稿に報告することとする。
- 7 「段」とは、佐久間（1992）の定義によるもので、市川（1978）の「文段」に佐久間（1987）の談話の「話段」の概念を加えて、文章・談話を直接に構成する言語要素を表すものとして規定されている。
- 8 佐久間（1989b：195）では、文⑪を主題文として挙げている。しかし、その後、佐久間（1999：19）では、原文Aに対して主題文の解釈に揺れのある尾括型であるとして、文⑨が主題文であると認めながらも、文⑪を主題文と解釈することも可能であろう、とするやや慎重な立場を取っている。
- 9 要約文の「表現類型」とは、統計的検定に基づく「残存数の多いZ単位」の原文中における文章構造上の機能を考えて、その残存傾向によって要約文を分類したものである。佐久間（1991・1994・1997）参照。
- 10 「原文残存認定単位」の分類基準については、佐久間（1997：5）参照。従来の分類基準を改善し、佐久間（1997）からは原文のみならず、要約文も原文残存認定単位の基準によって区切っている。佐久間（2000）では、原文残存認定単位を「情報単位」と改称し、原文の情報単位を「X単位」、要約文の情報単位を「Y単位」、要約文のY単位に原文のX単位が残存すると認定したものを「Z単位」と呼んでいる。本稿では、従来からの「原文残存認定単位」という名称を用いるが、概念と分析方法では、X・Y・Zの情報単位の規定に従うものとする。
- 11 「原文残存認定単位」の区分と「原文残存判定作業」「要約文の表現類型の分析」「要約文の誤用分析」を、佐久間氏を含む複数のTDKメンバーの協力を得て、行った。「原文残存判定作業」の結果については、本稿の分析観点①②③の基礎データとして用いた。今回は、主に韓国人学習者の要約文AK2の原文残存判定作業を行った。
- 12 佐久間（1989b：196）参照。
- 13 市川（1978）は、「文と文との論理的関係そのものを『文の接続関係』」と呼び、「文の接続関係の基本的類型」として8種（順接型、逆接型、添加型、対比型、同列型、転換型、補足型、連鎖型）を挙げている。

の類型を挙げている。

- 14 伊藤 (1997 : 176) は、「Z 単位があると認定された要約文の各文を「原文残存文」(以下、残存文という)」と呼んでいる。
- 15 佐久間 (1997 : 25) の「必須単位とは、日本人の要約文 AJ における原文残存率を統計的検定にかけた結果、要約文に有意に多く残存すると認められた Z 単位である。」という定義に従う。
- 16 「原文残存率」とは、各 Z 単位の残存数を要約者の総数で割ったものの百分率である。(佐久間 1989b : 14) 参照。
- 17 要約文 A の「文の接続関係」の判定は、要約文に表れた逆接型の接続表現 (接続詞・接続助詞) によって判断した。

## 参考文献

- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 伊藤 光 (1997) 「要約文の残存文と類型の評価」(佐久間編 1997 : 176-199)
- 佐久間まゆみ編 (1989a) 『日本人大学生の要約調査資料集—論説文 6 種—』筑波大学文芸・言語学系
- 編 (1989b) 『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- (1991) 『日本語教育のための文章理解と要約文の研究—韓国入学者を対象として』昭和 63・平成元・2 年度科学研究費補助金 (一般研究 C) 研究成果報告書
- (1992) 「要約文の類型分類」『文化言語学—その提言と建設』三省堂 pp.1081-1096
- 編 (1994) 『要約文の表現類型—日本語教育と国語教育のために—』ひつじ書房
- (1997) 『要約文の表現類型と評価方法—外国人学習者と日本人大学生の比較—』平成 6~平成 8 年度科学研究費補助金 研究成果報告書
- (1998) 「段落区分と要約文の表現方法」『国文目白』37 日本女子大学国語国文学会 pp.13-23
- (1999) 「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学文学部紀要』48 日本女子大学文学部 pp.1-28
- (2000) 『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』平成 9 年~11 年度科学研究費補助金 研究成果報告書
- 田中章夫 (1992) 「文章の題名・要約文とキーワードの関連性」『表現研究』56 表現学会 pp.1-7
- 藤村知子 (1998) 「要約文作成における中級日本語学習者のパラフレーズの問題点」『留学生日本語教育センター論集』24
- 邑本俊亮 (1998) 『文章理解についての認知心理学的研究』風間書房
- 李徳奉他著 (2002) 『高等学校 日本語読解 I 日本語を読む』教育人的資源部